法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-13

現代日本語における基礎味覚語彙の認識 : 小・中・高校生の場合

ITO, Koichi / 伊藤, 幸一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
66
(開始ページ / Start Page)
41
(終了ページ / End Page)
55
(発行年 / Year)
1988-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005510

Hosei University Repository

現代日本語における基礎味覚語彙の認識

——小・中・高校生の場合——

伊藤幸一

はじめに

現代日本語の味覚語彙に関して，少人数ではあるが大学生，主に3年生を対象に面接調査を行なって，得た資料を整理・分析，その認識的体系を求め，既に別途に報告している。更に，いくつかの大学の延べ9クラスから，味覚表現を採集する機会に恵まれ，急拠，その結果を追記した。

本稿は，その延長線上にあり，新しい試みも加えての高校生対象の調査や，規模は縮小せざるを得ないけれど，中・小学生対象の調査を行なって，得た資料を考察するものである(1)。筆者は，これらの調査に立会っていないが，真剣に協力してくれた生徒の皆さんと，積極的に指導に当たってくれた先生方に，信頼に足る資料を提供してくれたことに対して，その分析結果を報告することで，感謝の意を表したい。

現代日本語ということで，これからの語彙変化を問題にするならば，高校生の方がかえって，情報源としては適切である可能性もある。また，前述の大3の面接調査から得た資料の分析結果の確証や補充を得られるかもしれない。更に，語彙に関しては，まだ未完成であろう中・小学生からは，味覚語彙の習得に関して，あるいは，より完成度の高い大学生の味覚語彙認識の背景等に関して，何かを得られるかもしれない。

言語心理学的テスト法が，いくつか使用されるけれど，具体的方法や，その意義等，詳細に関しては，本稿では触れない。その都度，必要に応じて述べざるを得ないが，最小限に止めたい。高校生が，これら全てのテストに協力してくれ，特に後半の難しい作業に関しては高校生のみ，であったけれど，大学生との比較・対照がなされることは言うまでもない。

特に大3の面接調査に関して，いくら優秀な協力者を得たからといって，

Hosei University Repository

少人数すぎて信頼度に欠ける，と指摘されるかもしれない資料の分析結果に，一般性をもたせるという果敢な試行自身，具体的分析・解釈・予測等を含めて，否定されるか，それとも妥当性が明らかとなり，また，新たな発見があるか，おおいに興味が持たれる。

基礎味覚語彙

味覚表現として，どのようなものがあるか，まずは記してもらった。その資料を整理したのが表1である。各表現は，大9クラスからの集計結果の配列順が包括的なので，それに準じて，学年別に，その数を示した。表1以降は，大9クラスの場合と同様に，急激に減少，散在するだけなので，その他として，複数の人によるものだけだが，付加的に言及していく。

ついでながら，大9クラスに関して，平均的概数を示しておく。上位「にがい」までは9割を越える人が挙げているが，「しょっぱい」は7割程度，「しおからい」はその半分で4割を切り，以下，順次，大きく減少，「しぶい」は3割を切り，「おいしい」は2割程度，「あまからい」は1割台である。これを基準に比較・対照することになるが，全体的に見て，特に高2，中1は，ほぼ同じ分布を示すと言えるか。さて，その他も加え，より具体的に，学年別に検討してみよう。

高1は東京郊外の新興住宅地にある都立高校普通科の2年生43名（男

表 1

	高 2	中 1	小 4	小 2
あまい	43	42	37	27
からい	42	42	30	24
すっぱい	43	41	26	19
にがい	43	39	34	18
しょっぱい	30	34	29	7
しおからい	10	14	7	2
まずい		15	8	4
うまい		11	2	
あまずっぱい	16	21	3	5
しぶい	12	4	2	
おいしい		8	8	8
あまからい	5	11	2	2

Hosei University Repository

22，女 21)であるが，大9クラスと比較して，話題にすべきことはないだろう。敢えて指摘すれば「しおからい」が少ないかもしれないが，この程度は大9クラスのいくつかにも見い出される。もっとも，後で分かるけれど，知らない人が多くいたことと符合する。「あまずっぱい」「しぶい」が多く，更に，表1以外で「ほろずっぱい」が6名もいたことと好対照をなす。

それ以上に目を引くのは，一連の「まずい」「うまい」「おいしい」を，ひとりも挙げていないことである。大9クラスを引き合いに出すまでもなく，尋常一様では，あり得ないと思われる。未確認ではあるが，もっと具体的な表現を挙げるように指示する，あるいは，せざるを得ない状況になったのかもしれない。

中1は東京山手線沿線の新興地の公立中学校の1年生45名（男 25，女 20）で，ひとり解読できなかったけれど，やはり大9クラスと比較して，敢えて指摘すべきことはない。それでも「しょっぱい」が9割近くで「あまずっぱい」「あまからい」も若干多いように思われる。ついでながら，表1以外に「ほろにがい」「あまにがい」が，それぞれ5，3，更に「あまじょっぱい」「ほろずっぱい」が，ふたりずついたことでも分かるように，個人的にも全体的にも，挙げる表現の数が多く，いわゆる優秀であることに気づく。

小4は東京近郊の新興住宅地にある公立小学校の4年生37名（男 18，女 19）で，高2，中1ほどの数が挙げられていないのは当然で，恐らく知識の問題であろう。それでも「あまい」は全員，あとは大幅に減少していくが「すっぱい」を除いて，大9クラスのどれかと大きな相異は見られない。数字から見て「すっぱい」は「しょっぱい」に取られた可能性がある。中2の場合も若干多いように思われるが，「子供っぽい」表現であるとする指摘に対応しないか。更に「しょっぱい」は，極めて少ない「しおからい」と対照させて，同様に寸評したくなる。

以降は，大9クラスから推しても，極端に少なくなることは，うなずける。そのかわり，表1以外に「すっとする」，一連の「あつい」「つめたい」「ぬるい」「あったかい」が，それぞれ 4，3，5，2，2 挙げられている点，高2，中1に言わせれば，小2よりは知識はあるが，味覚表現としてはどうであろうか。

小2は同校の2年生33名（男17，女16)であるが，小2と言っても，なったばかりで，たどたどしい字から見て，大変だったと思う。予想できた

Hosei University Repository

ことではあるが，うち４名には，ただ苦しい思いをさせただけのようである。また，そう指示したわけではないのであろうが，約半数15名が，ある呈味物質を挙げて，それを形容する文章を書いている。

参考のために，それらの呈味物質を挙げておこう。一番多いのが10名による「からい」カレー(ライス)で，以下「すっぱい」レモン，「にがい」薬，「あまい」チョコレート，りんご，みかん，砂糖の順である。「あまずっぱい」みかん，「あまい」お汁粉，「しょっぱい」醤油は良いとして，「あまい」バター，苺，野菜となると，理解し難いが，それぞれ，ひとりずつ挙げている。

表１に戻ると，「しょっぱい」「しおからい」で激減するけれど，小４から推して，特に後者は，うなずける。また「しぶい」は誰も挙げていないが，後で明らかとなるように，知らない人が多かった。それは中１，小４に関しても言える。ただし「おいしい」の数の割には，その仲間の「まずい」「うまい」が少ないのは何故か。これも小２なら問題にするには及ばないのかもしれないけれど，敢えて解釈すれば，否定したり，乱暴な言葉は，色々な友達と付き合うにつれ，増えていくことに符合しないか。

以上，学年別に検討してみた。各味覚表現別に，学年による増減を，語彙習得につなげて解釈することは，いくらでも出来るが，大９クラスとの比較で分かるように，こじつけになりかねないので止めておく。既に，そう指摘されそうな記述があるやもしれない。ついでながら，以下の調査は，『まとめ』は別として，基礎味覚語彙７項に関してのみ行なわれる。その決定は，いくつかの条件を吟味することでなされるが，経緯については，ここでは触れず，不問に付す。

四大味覚語彙

科学的には四原味説なるものがあることを，既に，別途に論じたけれど，それと，どれほど対応するか，基礎味覚語彙７項から選んでもらった。結果は表２として整理される。しかし，この作業には，前掲表１における認識度の確認が含まれる(2)。つまり，余り挙げられなかった表現は，偶然なのか，知識のせいなのか，まずは，知らない表現を指摘してもらった。予想通り，どの学年にも「あまい」はひとりもいなかった。以下，複数の人によって挙げられたものを示そう。

高２は「しおからい」「しぶい」「しょっぱい」が，それぞれ 13, 2, 2

Hosei University Repository

表 2

	高 2	中 1	小 4	小 2
あ ま い	43	44	36	29
か ら い	42	44	34	21(7)
す っ ぱ い	42	39(2)	27	13(7)
に が い	22	28(7)	27	13(9)
し ょ っ ぱ い	18	18(8)	17	10(6)
し お か ら い	3	2(3)	4	4
し ぶ い	2	1(1)	3	6(3)

である。そのため「しおからい」の表1における数値が低いことは，既に指摘した。中1は「しぶい」「しおからい」「しょっぱい」が 6，2，2であり，小4は「しぶい」「しおからい」が 6，2 である。次の小2の場合も含め，訂正の際の消しゴムが問題で，不明確な場合があるが，一応，以上のようであるとしておく(3)，小2は「しぶい」「しおからい」「しょっぱい」が，順次 11，3，2 である。高2以外「しぶい」の数が多いことは想像に難くない。既に指摘したように，表1の数値を見れば，その対応が分かる。表2との対応も然りである。しかし，小2は別として，全学年，以降の質問に対して，それなりに答えていることから推して，まったく知らないというわけではなさそうである。

表2に戻ろう。高2は明解単純である。三大は決まり，次は「にがい」と，それより少ない「しょっぱい」であると解釈して良かろう。中1に関して二大は決定，残るふたつは「すっぱい」「にがい」「しょっぱい」に分散される。(　　)内は，もうひとつ挙げるとしたら，で得た数である。17名が答えてくれたが，「にがい」「しょっぱい」が非常に増えることになる。小4に関して，やはり二大は決定，残りも「すっぱい」「にがい」と明確に決ってしまうのだろうか。小2には，四大を選ぶのは酷だと思われたので，まず二大を選び，後で，ひとつ加えてもらった。(　　)内が後者の数字である。「あまい」が決まり，次が「からい」だろうか。後は「すっぱい」「にがい」「しょっぱい」のどれかを選んでいると解釈される。

これによって表1の信頼度は増大したと言える。表2は表1と，どれほど対応しているだろうか。ただし，偶然かもしれないが，小2の「しぶい」だけが破格となる。ところで四大味覚語彙は，上位4項であるとして良いのだろうか。「しょっぱい」を気にしながらも，「からい」は塩味を含むと

Hosei University Repository

か，塩味であるというのならば，真に，四原味説と一致することになる。

快・不　快

今回の調査は，まず味覚表現を挙げてもらうセイリアンス・テストの後，基礎味覚語彙7項のうち，知らないものを除いてもらうことを含め，重要なものを選んでもらうセイリアンス・チエックを行なった。小2に関しては，その段階でも遠慮が働いたので，セマンティック・ディファレンシャル・テストは止めることにした。小4に関しても懸念したが，大丈夫そうなので，中1，高2と共に依頼してみた。

快・不快のスケールは，中央にゼロを位置させ，快と不快の方向に，それぞれ5段階に区切ってプラスとマイナスを取り，各味覚語彙の位置を定めてもらった。集計の後，小数点以下2位四捨五入で平均値を求め，整理したのが表3である。ここでは都合上，低学年から言及していこう。

小4の特徴は「にがい」「しぶい」が，この順でマイナス価が高くなっていることで興味を引かれる。プラスには予想通りの「あまい」の他に「すっぱい」がある。中1になると「にがい」「しぶい」のマイナス価に大きな差はないが，順序が逆転する。プラスには「からい」が加わり，それも「すっぱい」よりプラス価が高くなる。高2の場合は，全ての順序に変化はないが，更に「しおからい」「しょっぱい」がプラスに加わる。すなわち「にがい」「しぶい」以外は全てプラスになり「あまい」は，むしろプラス値が低くなるが，「からい」「すっぱい」はかなり高い。

中・高校生ともなると発育盛りで，食物に対して一番興味を示す時期だろうと思われる。好奇心も強く，エネルギッシュに刺激を求める。味に関しても，むしろ好きだった「あまい」味よりも，嫌いだった「からい」味

表　3

	小　4		中　1	高　2
あ　ま　い	+3.9	あ　ま　い	+3	+2.6
す　っ　ぱ　い	+0.8	か　ら　い	+0.9	+2.2
か　ら　い	−0.4	す　っ　ぱ　い	+0.8	+1.7
し　ょ　っ　ぱ　い	−0.5	し　お　か　ら　い	−0.7	+0.6
し　お　か　ら　い	−1.5	し　ょ　っ　ぱ　い	−0.8	+0.6
に　が　い	−3.4	し　ぶ　い	−3.1	−3.1
し　ぶ　い	−3.5	に　が　い	−3.4	−3.3

Hosei University Repository

等を嗜好に取り入れるということなのだろうか。ついでながら，大3の場合は，「にがい」「しぶい」は高2と大差ないが，「あまい」が以前の位置に戻り，残りはプラス，と言っても，プラス1までに収まり，定着が起きると解釈して良いのだろうか。

これらの位置は，あくまで相対的なことなので，順序や，プラス価マイナス価の細かな数値は，さほど重要視するには及ばない。当然，大きく違うものは別であることは言うまでもないが，どれ程をそう見るかが問題である。全学年を通して，乳幼児も好む「あまい」味のプラス価は予測できるが，「すっぱい」味も然りであることの説明は，如何にである。既に別途に報告したように「すっぱい」味は，正確には「あまずっぱい」であり，「あまずっぱい」果実や，サワー食品の流通によって，中心的意味に変化が起きてはいないだろうか。

代表的呈味物質

小4には更に難かしいこと，「からい」「しおからい」「しょっぱい」の3項の相異についても説明してもらった。中2にも同じ依頼をした。高2には，同じ質問は避け，基礎味覚語彙7項に関して，代表的呈味物質を挙げてもらった。更に比喩表現，名詞表現の存在についても質問してみた。

まず，都合上，中2の結果から整理してみよう。3項は相対的に説明されるので，パターンを見い出す必要がある。とは言え，全体的に「からい」は独立していると見て良いか。ほぼ半数が，からし，唐辛子，わさび，カレー，醤油等，「いろいろ」という指摘も含め，具体的呈味物質を挙げ，更にその半数がピリ(ピリ)とか，「つん」とか，鼻や舌に感じるとか，の一連の指摘をする。

一方「しおからい」「しょっぱい」は，特に前者の塩に関する言及が多く，両者の関係は，いくつかのパターンに分類されるように思われる。最も明確なのは，同じ，あるいは近いとするものであり，この場合，両者は「からい」に含まれると断言する人もいる。次に「しおからい」は塩味に「からい」味が混合した味であるとするものである。この場合の「しょっぱい」は塩味であるとか，それに酢が加わっているとかである。「からい」程度が薄いと考えて良いのだろうか。

しかし，この関係が逆転するものもある。その場合は「からい」も加えて，程度の順が明確に示されており，塩に対する言及もある。これらの3

Hosei University Repository

パターンは発言における明確さの順でもあるが，ほぼ同数の人による。敢えて言えば，最後のパターンが，やや少ないか。更に，3項全てには言及がなされていなかったり，発言自身も不明確だったりする，最も解釈し難い一連のものがある。数としては，やや他の各パターンより多いと言えるか。これら4パターンで半数強を占める。残りは「しおからい」の方が「しょっぱい」よりも「濃い」と考えているのではないかと解釈されるものであり，その場合，明確に塩味に関して，そのように指摘する人もある。数は上記の各パターンとほぼ同じである。2番目のパターンに通じないか。

その他「しおからい」塩と「しょっぱい」醤油を何人かが挙げる。醤油は塩分に「うま味」の加わったものであると科学的には解釈される。実際に「しょっぱい」は化学調味料が加わったとする人もいる。更に，上述の，塩や醤油に酢が加わった味だとする人もいる。塩の「しおからい」味と，一瞬感じる「しょっぱい」味の関係，更に「しおからい」のは舌にくる，食べ難いが，「しょっぱい」のはおいしい，食べられる，とする発言は，明らかに，この仲間に加えられ得る。「しおからい」漬物と「しょっぱい」塩という関係も，ここに加えて良いだろうか，これらの解釈は2番目のパターンにつながっていく。

これで，ほぼ全てに言及したことになる。もうひとつ「からい」「しおからい」「しょっぱい」は「あまからい」「しおからい」「すからい」と言い換えられ，3項は「からい」の種類であるとする指摘が興味をそそる。それでいくと，醤油でも「からい」味として理解できることになるか。

さて小4による説明を整理してみよう。17名にしか答えてもらえず，うち4名は，3項全てには言及がなされていないことも含め，大部分にとって難問であり，はっきり「分からない」と答えている。「からい」は中1の場合と，ほぼ同じ指摘が多い。「しおからい」も，やはり塩味であるとの指摘が多い。そして「しょっぱい」と同じであるとする指摘がいくつかある。「しょっぱい」は「すっぱい」に類似しているとか，明確にレモンの味であるとする人もいる。「にがい」という発言もある。「しおからい」は「しょっぱい」塩と「からい」味が混っているとか，「しょっぱく」てたまらないとか，「塩っぽい」とかの意見もある。逆転して「からい」のは醤油で，「しょっぱい」の方が「しおからい」より塩がたくさんであるとする人もいる。

一方，皆どれも同じであるとする人もいる。恐らく「からい」で表現さ

Hosei University Repository

れるのであろう。「からい」は子供が食べられないとか，おいしくないとかで，すごく「からい」かと思うと，普通の「からさ」の「からい」方よりも，「しおからい」は特に「からい」とする説もある。また「からい」は「しょっぱい」と同じであるとする説もあるが，その場合「しおからい」は別のようである。これらに，つながりはあるのだろうか。既に「すっぱい」に関して述べたように，「からい」の中心的意味も「甘口」になりつつあるのかもしれない。

次に，高2に挙げてもらった基礎味覚語彙に関する代表的呈味物質を，ここで整理してみよう。延べの多い形容詞順であるが，予測のつくものばかりで，集中が起き，どの形容詞も10項ぐらいにまとまる。その分布から見て，半数以上が挙げたものを代表とし，10人から15人が挙げたものを全般的に記すだけで充分であろう。

「あまい」は砂糖が代表で，チョコレートも記せる。あとは色々で20項ぐらいになり，集中が起きていない。「からい」は唐辛子，カレー(ライス)，からし，わさびの順である。「すっぱい」はレモンが代表で，酢(の物)，(夏)みかん，梅干の順である。「しぶい」ものは少ないので集中が起き，渋柿が代表で，お茶がぎりぎりで記せる。3項しか挙げられていないので，少ないけれど，栗(の渋)も記しておこう。「にがい」は，ぎりぎりで薬と(ブラック)コーヒーを記せる。「しょっぱい」は塩が代表で，醤油も記せる。「しおからい」は(いかの)塩辛が代表である。延べにして上位3形容詞はほぼ同数で，その半分強の，やはり，ほぼ同数なのが下位3形容詞である。「しぶい」は後者に近い。前掲表1，表2と対照させると，他の形容詞はそこそこの対応があるけれど「しぶい」は大きく異なる。

比喩表現についても解答を得ているので，ここで整理しておこう。代表的なものを羅列しただけでは意味がなさそうであるが，一応，延べの多い形容詞順に，3人以上が指摘したものを記しておく(9)。「あまい」は考え，マスクや顔(つき)，初恋を含めて恋愛，香り，躾，点数のつけ方を含め採点，野郎を含め人(間)である。「しぶい」は顔，洋服あるいは(その)色，男などを含めて人である。「にがい」は経験や体験，思い(出)，顔，失恋である。「からい」は項数が少なく集中していて，採点，点数のつけ方である。「すっぱい」「しょっぱい」「しおからい」は敢えて，ここに記すほどのものはない。ここでも「しぶい」が再び，更に，それとは逆の意味で「すっぱい」が新たに，特殊性を示す。

Hosei University Repository

更に，形容詞表現に—SA，—MI を付すことが出来るかどうか，また，そのような各詞表現を使うかどうか，質問してみた。語形に関することは，共時的な意味論には直接，関係のないことではあるが，認識的には，何か対応することがあるかもしれない。—SAに関して，疑問とする人，否定する人，合わせると，「あまい」はゼロ，「からい」「すっぱい」「にがい」「しぶい」「しょっぱい」「しおからい」の順で 2，5，7，7，11，24 である(5)。合計数が多くなるにつれ，否定の数も増えるので，合計が半数を越える上に，否定数が疑問数に追いつく「しおからい」は問題にせざるを得ないか。ここでも「しぶい」がまた，話題となる。

—MI に関しては，疑問，否定共に，非常に増える。「あまい」はゼロ，「にがい」「からい」「しぶい」「すっぱい」「しょっぱい」「しおからい」の順で 2，12，16，29，36，38 である。こちらも合計数が増えると否定数は急増し，合計が半数以上越えると，否定数が疑問数を越える。そこで「すっぱい」「しょっぱい」「しおからい」は問題とせざるを得ないのではないか。また「しぶい」が話題となる。

どこでも後塵を拝す「しおからい」「しょっぱい」と同様に「すっぱい」は比喩表現においても特殊である。逆に「しぶい」は，—SA，比喩表現，代表的呈味物質の指摘においても中堅を維持する。ついでながら，これらを含め，分布状況に関して，代表的呈味物質と—SA，比喩表現と—MI の間に，偶然であろうか，若干の対応があるように見えるのは，気のせいだろうか。

認識的体系

基礎味覚語彙 7 項を対象にして，35組のトライアッズ・テストは大変厄介な作業なので，懸念しながらも高 2 だけに依頼した。やはり難しかったとみえて，全ての組合わせに答えてくれたのは19名であった。集計結果は表 4 である。(　　)内は小数点以下四捨五入での百分率である。数値の大きいものから見ていこう。

予想通り「にがい」「しぶい」の対が最も類似していると認識されているようだ。次に「しょっぱい」「しおからい」の対が，すぐ続く。更に「からい」「しおからい」の対，次に「しょっぱい」「すっぱい」の対，少し間があいて 5 割を切るけれども「しょっぱい」「からい」の対の順となる。大 3 の集計結果と比較すると，2 位と 3 位が入れ換わっているだけ

Hosei University Repository

表 4

か ら い	21(22)						
しおからい	14(15)	71(75)					
しょっぱい	21(22)	46(48)	76(80)				
すっぱい	27(28)	23(24)	31(33)	61(64)			
し ぶ い	5(5)	30(32)	26(27)	19(20)	15(16)		
に が い	12(13)	32(34)	25(26)	18(19)	13(14)	79(83)	
	あまい	からい	しおからい	しょっぱい	すっぱい	しぶい	にがい
累 積 数	100	223	243	241	170	174	179

で，より重要な各数値も含め，ほぼ同じである。また累積数に関しても大差ないと言える。

更に，折角の資料を活用したく，追加を試みた。いくつかの組合わせに答えてくれなかったもののうち，4組までを許容，集計してみた。1組と4組がひとりずつ，2組と3組がふたりずつで，計15組欠けることになる6名の資料を追加した。これだけを集計すると，やはり数値の大きい対は，上記の順で 27, 16, 23, 18, 10 であると言える(6)。それを表4に加えても全体のバランスは変わらない。2位と3位が入れ換わって，かえって大3の集計結果に近づくと言って良いか。

個人資料に関して，累積数から，すぐ判断できるが，「あまい」分離型は4人で「にがい・しぶい」分離型はいなかった(7)。しかし追加分も含め，条件をゆるめて，累積数の増減を，ひとつだけ許すと，前者，後者共に，ふたりずつ加わる。全体像を空間に描くと，当然のことながら，大3の場合と，ほぼ同じになるが，快・不快のスケールにおける位置づけから分かるように，少しばらけることになるか。「あまい」が一方の極をなし，「にがい」「しぶい」が共に他方の極をなし，残りの4項は中程に位置することになる。

二　分　割

より明確に認識的体系を得るべく，更にキイ・アウト・テストも高2にやってもらった。トライアッズ・テストよりも難しいのではないかと思われたけれど，3名の表記が解読できなかっただけで，想像を越える資料が得られた。整理したのが図1である。項数の少ないグループが多い方から

Hosei University Repository

分離されたとすると，最初の二分割で分離されたのが一段目に記してあり，残ったグループの中から更に分離されたのが二段目，その際に残ったのが三段目である。更に分割される場合は分割線で示される。

見て分かるようにK，Lは「あまい」分離型で，Nは「にがい・しぶい」分離型である。Mはその他，あるいは，便宜的に「からい」分離型とでも呼べるか。上記の説明だけでは，上下の段を逆にする必要が出て来るが，ここでは不問に付す。LはKにおいて「すっぱい」の上の矢印を一段目まで延ばすことで記せるKの一部である。しかしLのパターンは数値で分かるように非常に多く，かつ，二段目以降も明確なので別記した。「あまい」分離型の代表的変形と言える。実はM，Nの中にも，その他の変形が，この順で 3，2 含まれているが，それも，ここでは不問に付す。それを算入すると「あまい」分離型の数は残りの3倍となる。ついでながら，途中までしか分割が行なわれていないものも，それぞれ，いくつか含むことを記しておく。

図を一見するだけで充分理解できるが，分割パターンの多い順に説明しよう。最も多い分割はLのうち三段目で「しょっぱい」が分離されるQである。次がKのうち三段目中央で分割されるPである。これと同数なのが，Kのうち二段目「にがい」「しぶい」の対と三段目「しおからい」「からい」の対が入れ換わることを除けば，まったくPと同じものである。その

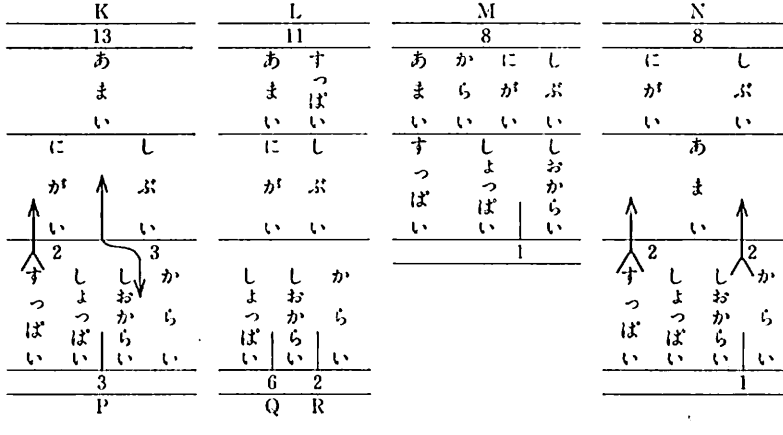

図　1

Hosei University Repository

次にはLの三段目で「からい」が分離されるRと，更にK，N共に三段目の「すっぱい」が二段目に加わったものが同数である。またNの三段目「しおからい」「からい」が二段目に加わったものも然りである。以上，複数の人によって挙げられたものだけを示したが，全体の半数を占める。

ついでながら，大3から得られた資料を，この図にあてはめると，AはNの二段目に三段目「からい」が加わったもの，BはKの二段目に三段目「すっぱい」が加わったもの，CはNの一段目に三段目「しょっぱい」が加わったもの，DはBと同じだけれど，その後はPと同じ，EはAと同じ，FはKの二段目の対と三段目「しおからい」「からい」の対が入れ換わるだけでPと同じである。大3の資料分析の際に行なった提案は，予測も含め，有意義であったことが分かる。

ま と め

高2に対して最後に，いくつかの呈味物質を提示，どんな味がするか指摘してもらった。予測のつくものばかりではないけれど，大半が同じような形容反応をするもの，まちまちで収拾がつかないもの等，多様性に富む。細かな数字は意味がないので記さないが，整理して『まとめ』とする。反応が最も明確なものから挙げていこう。

「からい」唐辛子と，予想通り，分からない人も一割程度いた「からい」ラー油が，まず挙げられるだろう。チョコレートは「にがい」との指摘もあるかと思いきや，市販されているものは何でもマイルド志向のせいか「あまい」ようである。それでも「あまい」コーヒーは飲まないようで，全て「にがい」のである。当然ながら，ビールは皆「にがい」と言う。

一見，明確であると思われる，お茶は，「しぶい」とする人の半数に当たる人が「にがい」とも指摘する。それ以上に問題ないと思われる「すっぱい」はずの梅干も，全体の2割ほどが「しょっぱい」と言う。ところで一般に「すっぱい」と言って好まれるものは，実は「あまずっぱい」ことが多いが，その絡みにかかわるものを挙げてみよう。

ヨーグルトは「すっぱい」の方が「あまずっぱい」より僅かに多く，「あまい」とする人は，いるか，いないかである。すももは「すっぱい」とする人の半分が「あまずっぱい」で，「あまい」が増えて，ほぼ同数に近づく。カルピスは「すっぱい」より「あまずっぱい」が少し多くなり，「あまい」はそれらのほぼ倍になる。「あまずっぱい」の半数が次の「あま

Hosei University Repository

い」に，次の「すっぱい」の半数が，更に次の「あまい」に移動し，「あまい」が順次，増大すると大雑把に指摘できる。

基本的な味覚表現の中で最も厄介で，識別しずらい「しょっぱい」「しおからい」「からい」の絡みに関しても整理できる。涙は大部分の人が「しょっぱい」で，いないと言っても良い程の人が「しおからい」「からい」と指摘する。みそ(汁)では「しょっぱい」が減少するけれど，それでも「しおからい」「からい」の3倍程度いる。塩でも，まだ「しょっぱい」が多く，その半分が「しおからい」に，更にその半分が「からい」に，順次，減少，分散する。

醤油は，順序から行くと「しおからい」が増えて，と言いたいけれど「しおからい」の分が全て「からい」に移動し，数的には「しょっぱい」に近づく。「しおからい」と指摘する人が，いないのは何故か。ここで破格として記すよりは，上記，お茶，梅干と並記した方が良いのかもしれない。海水でこそ「しおからい」が増え「しょっぱい」と同程度になり「からい」は，ほんの僅かである。醤油とは逆で「からい」の分が「しおからい」に移動すると見た方が良いか。更に「しおからい」が増えて「しょっぱい」を上回り「からい」が僅かなのが塩鮭である。塩辛では更に「しおからい」が増え，僅かに挙げられる「しょっぱい」「からい」の6倍程になる。

塩分は少なくなると甘味を感じるらしい。涙や，みそ(汁)の位置が分かろうというものである。塩は，精製されたマイルドな食塩の味を連想しているのであろう。濃度も増し，にがり成分も含む，天然の海水と好対照をなす。粗塩を多量に使う塩鮭や，更に「からい」唐辛子なども使う塩辛の位置も理解できる。そこで，醤油が「しおからい」とは言い難いことも分かるような気がする。

どれも，分からないとする人が，ひとり，ふたりいて，複雑なものを，いくつか挙げてみよう。「からい」が絡むとも言える。酒は「あまい」が半数近く，「からい」「にがい」を加えて鮮明な等差級数をなす。「あまからい」も僅かにいる。焼肉のたれは「あまい」「あまからい」が，ほぼ同数，その半分が「からい」で，「しょっぱい」が更にその半分で僅かである。佃煮は「しょっぱい」が逆に一番多く，次に「あまい」「あまからい」「からい」の順で僅かずつ減少，半分ぐらいまでになる。

最後に，どのように形容するか楽しみな，恐らく，単独で味わうことが

Hosei University Repository

ないだろう化学調味料に関して整理してみる。予想通り「変な味」と指摘する人も含め「分からない」とする人が多く「あまい」がその半分，更にその半分が「にがい」といった所である。

どの呈味物質も，各人，同様のものを想定して形容しているはずはなく，好みが絡んでいることは想像に難くない。実際の言語使用の場面を採集しての分析ではなく，言葉の上での内省による連想形容であることを，ここで指摘しておく必要があろうか，『代表的呈味物質』における小4，中1の「しおからい」「しょっぱい」「からい」の相異に関する説明や，高2自身が挙げた代表的呈味物質との対応は，いかがであろうか。

今回の調査によって新しい，いくつかのことが現われ出た。新しい試みに関しては当然である，と思われるが，前回の大学生の面接調査の折に全て試みられていて，予想のつくことが多い。それでも何箇所か，筆致から気づくように，新しい発見がなされている。それらに関しては，またの機会に考察しよう。ところで，複雑になるだけなので，いちいち指摘はしなかったけれど『はじめに』記した筆者の試行を否定するような材料は，ほとんど見つからなかった，と言える。目下の所，確証されたし，補充も得られた，と解釈して良いのではないだろうか。

注

（1） 今回の調査は，新学年の編成期にまたがって行なわれたので，学年で計算すると違ってくるが，実質は，ほぼ3年間隔である。ついでながら，男女差はなさそうなので本稿では話題としない。

（2） 既に決定した基礎味覚語彙7項に関して，それで良いのかどうかの確認の意味もあることは言うまでもなかろう。

（3） 中1の「しおからい」「しょっぱい」は，ひとりずつなのかもしれない。

（4） 挙げられる名詞同士で包摂・重複関係があり，それらをまとめて3人以上ということなので，正確には，ひとりしか挙げていないものも記されることがある。

（5） 「しぶい」は「にがい」と同数だけれど，否定する人が多いので，後に記した。

（6） 「にがい」「しおからい」，「にがい」「からい」，「しぶい」「からい」の対が，実はそれぞれ 12, 11, 11 あることを付記しておく。

（7） 「あまい」分離型とか「にがい・しぶい」分離型という表現は，キイ・アウト・テストからの借用である。